

## ほめの諸相

### — 日本語母語話者は何をほめと認識するか —

坂本恵・ナジェージダ ウェインベルグ

【キーワード】 ほめ、理解要請表現、形式ほめ、実質ほめ、お世辞

#### 1. はじめに

最近「ほめ」に関する研究が盛んに行われている。「ほめ」に関する定義もさまざまであるが、ここでは「相手の状態(含む持ち物)、行動、パフォーマンスについて、自分の好意的、肯定的な気持ちを伝えること」と定義してみるが、実際には、これにあわないものも「ほめ」と認められることもあれば、また、この定義にはあうものの「ほめ」とは認定されにくいものもある。例えば日本語で「お世辞」と呼ばれるものは「ほめ」とはどのように違うのか、それを規定するのは実は難しいとも言える。

「こんな言葉でほめられたい—大人だってまだ伸びる」と題した「ほめ」に関する新聞調査(朝日新聞2015年9月12日)がある。「どんな言葉でほめられたい」という質問に対するランキング調査の記事の中で、「ほめ言葉とお世辞、どこが違うの?」「どうせ社交辞令でしょ、何か下心ある?」などの反応が紹介されている一方、『「ありがとう」も立派なほめ言葉』とも紹介されている。何を「ほめ」と考えるか「お世辞」や「社交辞令」との関係はどう考えるか、また、「ほめ」と「下心」が同じ文脈で出ているように、ほめる際に別の目的があると考えられる種類の「ほめ」もある。「ほめ」を分析する際、具体的な表現、言葉で考えるか、あるいは、ほめる目的で考えるか、さまざまな分類の方法があると考えられる。「依頼」「誘い」といった行動展開表現も具体的な表現からだけではその言語行動を分析することは難しいが、「ほめ」「苦情」のような理解要請表現は具体的な言語表現からだけでは分析が十分にできない傾向が強いと言える。特に「ほめ」は「お世辞」「社交辞令」以外にも関連表現は多い。「ありがとう」のような感謝の表現は相手の行動を評価しているものと考えれば、「ほめ」の一種と考えることもできる。「ほめ」の目的の一つは相手に対する親近感、親愛の情を表すものであるとも言えるが、そのように考えると、「励まし」「慰め」なども近いところにあることがわかる。

ウェインベルグ(2015)の、ビジネス場面でほめた、ほめられた経験について聞いたインタビュー調査によると、その中でも、同じビジネス場面と設定しているものの、「ビジネス場面にはほめはない」とする人と「ビジネスの場面ではよくあること」とする人の二通りの答えがある。これは、インタビューに答えた人が何を「ほめ」と考えているかの違いによるものであろう。

本稿では、「ほめ」と関連表現について、このウェインベルグ(2015)による日本語母語話者に対するインタビュー結果を中心に、関連する新聞記事、内省、以前の研究結果などから分類を試みる。一般には「ほめ」と認定されないものについても扱う。同時に、受容者からの視点、どのように受け取る可能性があるかについても分析してみたい。

## 2. 研究方法

「ほめ」に関連する言葉、言語表現は数多く見られる。「ほめ」の関連表現は次のようなものが考えられる。

ほめ言葉、お世辞、お愛想、追従、へつらい、おべっか、おだて、ヨイショ、嫌み、あいさつ、エチケット、社交辞令、フォロー、励まし、慰め、好意、配慮、感謝、評価

このうち、「お世辞、お愛想、追従、へつらい、おべっか、おだて、ヨイショ」は「ほめ」の範疇には入らないと考える可能性が高いものであるが、表現されたものを見た場合、「すてきですね」「すごいですね」などを考えると「ほめ」と区別がつきにくいことがわかる。反対に、「ほめられてうれしい」と感じられる場合に、いわゆる「ほめ」の表現になるとは限らず、他の表現、あるいは行動で示す場合もある。また、相手のことに言及することで好意、感情を伝える、という意味では、励ますことなども「ほめ」に近い言語行動であると言える。

以上のようなことから、「ほめ」を分類する場合、実際に言語表現として表れたもので分けるのではなく、本当に評価して表現する場合と、別の目的を持ってほめなければならないと感じ、ほめる材料を探す場合と大きく二つに分けて考えることとしたい。筆者は以前この二者の違いを「実質ほめ」と「形式ほめ」と分類命名した(蒲谷・川口・坂本(1996))。「ほめ」関連表現の意味や目的によって「ほめ」全体を分析、分類してみたい。

分類は日本語母語話者へのインタビュー、これまでに集めたシナリオなどからの用例、新聞記事や教材などを元に、内省からの作例も加えて行う。日本語母語

話者へのインタビュー調査は日本語とロシア語でのビジネス場面における「ほめ」の違いを明らかにするために行われたもので、異文化間ビジネスコミュニケーションの経験を持つ日本とロシアのビジネス関係者に対し、ビジネス場面でのほめ言葉や記憶に残った表現について質問したものである。19名の日本語母語話者のインフォーマントから得た回答の中で、日本語母語話者が何を「ほめ」として認識しているかという点についてのものを抽出し、分析を行った。この調査での日本語母語話者はすべて異文化コミュニケーション経験者であり、母語環境だけでは気づきにくい特徴も、異文化との比較対象の中で認識しやすいと考えられる。

### 3. 「ほめ」の分析

#### 3.1 「形式ほめ」

相手を純粹にプラス評価しそれを伝えるという「ほめ」の一般的に考えられる目的以外の別の目的があって、相手をほめたいと思い、ほめる材料を探して伝える、というタイプの「ほめ」を「形式ほめ」とする。先にあげた「ほめ」の関連表現を手がかりに、その目的によってここでは10に分類して示す。

##### 3.1.1 相手の気分を上げる(おだて、追従)

まず、「相手の気分を上げる」ことそのものが目的であるようなほめが存在する。「おだて」と呼ばれるような場合である。「おだて」に関しては「豚もおだてりや木に登る」ということわざのようなものも存在し、また、「おだてたって何も出ないよ」というよく使われる表現もあることから、相手を持ち上げる、ほめることによって何か、対価を期待して行うものであると言える。「おだてたって何も出ないよ」という表現はおだてられた、つまりほめられた方の台詞で、「おだて」た側が「おだて」とは思っていないこともある。単なる「ほめ」を「おだて」として受け取り、一種のほめの受容の回避としてそのように表現することもあると言える。インタビュー調査の中では「依頼の時には『おだてる』』という回答もあり、対価を得ようとするほめを「おだて」と認識する向きもある。「おだて」は俗語では「ヨイショ」と呼ばれることもある。

さらに「追従」「おもねり」「へつらい」などがあるが、これらは主に下の立場から上の立場のものをほめる、持ち上げることによって、気分をよくさせ、その結果、自分の評価を上げたい、というときに使われるものである。その意味で、「相手の気分を上げる」ものではあるが、その究極の目的は自分のためであると言え、

この分類の中での「ほめ」からは外れるものであるとも言える。

### 3.1.2 依頼の前置き、理由付け

よく使われるものとして、何らかの依頼行為を行う前に前置きとして、あるいは依頼の理由付けとしてほめが使われることがある。「字がきれいだからお願いしたい」などの例である。依頼は相手に何らかの負担をかけるものであり、それを和らげるために、最初あるいは後付けでほめることはよくある。また、なぜその人に依頼するのか、という理由付けが必要な場合、「顔が広い」「よくご存じだ」など、理由付けとして相手を持ち上げる表現を使うこともある。

インタビュー調査の中では以下のような回答がある。<sup>1</sup>

〈依頼の場合にはほとんどの場合に感謝か謝りを付け加える。また、能力について言う「いつも細やかに仕事をしてくださって」などと言う。〉

〈依頼の前にほめると嫌らしいのでやってもらった後に。「あなたやさしい、ありがとう」と言う。〉

依頼に「ほめ」がつきものであるという認識があると考えられる。

### 3.1.3 批判の和らげ

これもよく使われる方略である。相手を批判するとき、あるいは苦情を言うときなどに前置きとして相手をほめることがある。相手に対して負担の大きいことを言うときに、それを和らげるために小さいことでほめる。これは職場環境ではよく使われているようで、長くほめられた後「ですが」が来るとその後は批判が来るので恐ろしいという報告もある。苦情を言った後にも見られる。前か後に和らげの言葉は必須なのであろう。以下のような回答例が見られる。

〈批判するときには礼儀みたいなもので、最初はポジティブなことを言って、気分をよくさせておいて、その状態で「ここはだめだ」と言う。15-20年前はしなかったがアメリカの影響だろう。〉〈最初にほめることは必ずする。常識になっている。いきなり批判する人もいるけどよくないと思われる。〉〈若いときは直接的に非難したが、年取るとまずほめる。そうは思っていないのに「すばらしい」などと言うようにして(非難との)バランスをとる。非難するときはほめた方がいい、ほめられる方が後のコミュニケーションがよくなる〉

苦情のあとのほめを「フォロー」と表現した例もある。

一方、次のような意見もある。

---

<sup>1</sup> 以下、インタビュー調査の回答からの引用は〈 〉で示すことにする。

〈苦情、批判でほめることはない〉〈苦情にほめはない〉

実際にそう認識している、そのように行動しているという可能性もあるが、「ほめ」を狭義で捉え、批判の和らげに使うようなものは「ほめ」とは認識していない可能性もある。

### 3. 1. 4 提供のお返し

プレゼントをもらったとき、ごちそうされたとき、家に招待されたときなど何かを提供されたときには、そのものをほめるのが一種の「お約束」である。プレゼントは「すてき、気に入った」、ごちそうされたものは「おいしかった」、招待されれば「すてき、庭（調度、等々）がいい」などとほめることが一般的である。「感謝」でもあり、「お返し」のようなものであると言えよう。

### 3. 1. 5 社交辞令

初対面の挨拶としてその場所や相手の属する組織、出身地など相手に関することについてほめることもよく使われる方略である。いきなりビジネスの話はできないので、前置きとして使われる。最初に名刺交換の延長で何かをほめることが多いという報告がある。話をする場合の雰囲気作りであるとも言える。ビジネス場面でも組織外の取引先などの関係箇所との対話の中でよく使われるようである。この場合、親しい関係ではないため、相手の個人的なことに关してはほめにくい。場所、所属する組織、出身地などがほめの対象になるのはそのためである。この場面に関してはたくさんの回答があった。ビジネス場面では多用されるのであろう。「お世辞」「挨拶」と認識されることが多い。なお、「お世辞」「挨拶」は形式ほめ全般について使われることがあり、ここではそれをさらに分類するため、この二つについては項目としないことにする。

〈初対面で知らないのに「お噂はかねがね」「お世話になっております」「ご活躍ですね」などと言う。明らかなお世辞だ。〉〈きれいなオフィスですね、何々がいいですね、などは挨拶代わりに使われる。〉〈相手の出身地を褒める、その人に関係しているものを褒める、お世辞かもしれない〉

### 3. 1. 6 お愛想

3. 1. 5の社交辞令とも近いが、話の中で相手の気分をあげて、こちらの言い分を、あるいはこちらの依頼を取り上げてもらうために言うような場合が「お愛想」に当たると言える。特に目的なく、自分の評価を上げたいなどのために行う「おだて」とは異なり、何かの前置きや良好な関係を保持することなどの目的で行われるものを「お愛想」としたい。特にビジネス場面では契約を取りたいような場

合に相手に対して相手へのプラスになることを言うことが多いようだ。一般の場面でも、相手との関係をよくしたいときに何か相手にプラスになることを言うことを「お愛想」などと表現することがある。以下のような回答がある。これも「お世辞」と表現することが多いようだ。

〈話すときに相手は何をほめると喜ぶかと考える〉

逆に以下のような意見もある。

〈意識してほめないようにしている。(ほめて)下心があると取られないようにする。ただ、服装などいい点について触れることはある)〈個人的なことは言わない。特に能力については考えるが言わない。しかし、挨拶としては言うこともある。〉

ほめることは下心がある、つまり、何か他の目的のためであるという認識があることを示している。ほめない、と言いながら、実際には「挨拶」などのつもりで「ほめ」を行っていることを示している。

### 3. 1. 7 お祝いの場面での「ほめ」

受賞などの祝賀会の祝辞にも「ほめ」はつきものである。祝辞だけでなく、パーティーの席などでもその当事者にはお祝いの言葉と同時にその対象となったこと、ものをほめることは一般的である。

〈昇進したときにはお世辞とか褒めばかりである。〉〈お世辞ではなく褒め、お祝いなのでその人を気持ちよくさせてあげるようなことを言う〉

この回答者は「お世辞」と「ほめ」をわけて考えているようである。「お世辞」は他の目的があってその認識がなくても言うものであり、相手を喜ばせるものは「ほめ」と考えているのであろう。

〈日本ではその人の努力などを皆が知っている、というスタイルのお祝い、外国ではそれを聞いてどう思うかを示す〉

お祝いの場面での表現を分析的に考えている。日本語の世界ではその人について、努力などを「ほめる」ことが多いという指摘であろう。

〈昇進、成功の場合、その人が嫌いでも褒める〉

お祝いとしてその人を「ほめる」ことは必要なことだという認識がある。

### 3. 1. 8 教育としての「ほめ」

昨今「ほめて伸ばす」ことが流行である。教育的な効果を狙ってほめることもよく行われることである。相手が子どもであっても大人であっても、実際以上にプラスの面を強調して相手の気分をあげ、その後の学習、仕事に効果を上げたいという方略がよく見られる。実際、先にあげた2015年9月12日の朝日新聞の記事

事では、副題に「大人だって（ほめれば）まだ伸びる」とあり、相手を伸ばすためには「ほめ」が必要だという認識があるようだ。これも、本当に評価しているからというより、教育や相手を伸ばすために、いいところを探して伝えるという意味では、他に目的を持った「ほめ」であると言うことができる。新聞記事にも「現役を含む教員経験者からは、子どもをほめる効用を説く経験談が多く寄せられた」とあるように、ほめることは教育上効果のあるものであるという認識があるようだ。

### 3. 1. 9 慰め、励まし、応援としての「ほめ」

相手が悪い状況にあるときに元気づけようと慰めるために、または励ますために相手にとってプラスのことを言うことも広義のほめであるということができる。病气の人に「顔色がいいですね」とか、「元気そうになった」、あるいは落ち込んでいる人に、「がんばっているよ」「よくやっているよ」などと言うことは実際の生活の中の場面で多いといえる。相手を元気づけたいという意図を持つときに、ほめられるような材料を探して伝えると考えるとこれも他の目的を持った「ほめ」の一種であると言える。慰める場面での「ほめ」を聞いた回答にも次のようなものがあった。

〈持ち上げる意味で慰める、持ち上げるのが褒めもある。「あなたしかない」など〉

〈気持ちを持ち上げるために大げさに「大丈夫だよ」と言う。〉

これは厳密に言うと「ほめ」とは言えないかもしれないが、自分自身を否定的に見ている相手に対し、その人を肯定することは相手のプラス面を伝えるという意味で「ほめ」の一種であると言える。

〈がんばっていたことに共感、シンパシーを示す。「みんな見ていたよ、だけど残念だったね」など。ほめられている、お世辞言われていると感じさせないように言う必要がある。〉

慰める場面では「大丈夫」と言ったり、相手の話を聞いたりすることが慰めになり、そのような場面では、「ほめはない」と回答する例もある。しかし、「〇〇がいい」という直接的な「ほめ」ではなく、「よく頑張った」「大丈夫」なども相手のことを肯定的に言うという意味では「ほめ」の一種であると言える。

### 3. 1. 10 相手との距離を縮めるための「ほめ」

これは後述の「実質ほめ」に近いが、親しくになりたいという目的が先行しているときにはこちらの分類になると言える。まだ関係が深くないときに、親しくになりたいという目的を持って、積極的に相手のことをほめ、その結果相手との距離

を近くするという方略である。相手に自分についていい印象を持ってもらいたい、友達になりたい、社会的な立場を持った関係から個人的な関係になりたいと思うときに、相手に関心を持っていることを伝えるために、相手のいいところを見つけてほめるものである。これを「お世辞」と考えるかどうかは人によって分かれるだろう。

### 3.2 「実質ほめ」

相手について好感を持ったことを伝える、それが「ほめ」であるとする、こちらが第一義の、狭義の「ほめ」であり「実質ほめ」と言えるが、好感を持ったからと言って必ずしもそれを相手に伝えるとは限らない。相手に伝える以上は何らかの効果を期待しているとも言える。「実質ほめ」を言語行動や実質的な行動などの現れ方によって4つに分類する。

#### 3.2.1 「ほめ」(狭義)

相手の状態、持ち物、行動などに好感を持ち、いいと思う、好きだ、すばらしいと思うことを伝えるもので、狭義のほめであると言える。「その髪型(服、バッグ等々)いいね」などが典型的なもので、「いい」などの評価なしに、「髪切ったの」「そのバッグ〇〇でしょ」など単に事実に触れるだけでも十分にほめとなる。相手に関心を持ち、相手の動向をよく見ていることを示すものだからである。相手への親近感、好意を示すものとも言える。その意味でこれは誰にでも言えるものではなく、親しい関係、同僚であってもかなり親しい間柄でなければ言いにくい。特に昨今の「セクハラ」への注意もあり、異性には言いにくいものである。よく問題になる例だが学生が教師の、あるいは講演会の受講者が講師の服装などをほめることも問題視される。友人関係になっていないと相手の個人的な領域に属するものについて言及することは憚られる。親しくなるということは役割を背負った社会的関係から、役割のない個人と個人としての関係になるということで、個人的な関係にならないと狭義の「ほめ」はしにくい。このタイプのほめは親しくなっていく感情、気持ちの交換の一種であると考えられる。今回の調査はビジネス場면을対象にしているため、この例はあまり出てこなかったが、それを示す次のような回答もあった。

〈相手の持ち物、着ているもの、髪型をほめる。ビジネス場面ではない。〉

これらを「ほめ」と考えるが、そのようなほめはビジネス場面にはないとしている。ビジネス場面で出てくるのは「お世辞」と捉えていると考えられる。



### 3.3.2 評価

主に相手の行動、技能などをほめることで立場のある人からが原則となる。アンケートの回答から、上司から部下など、評価する立場、能力のある人がその人の行動、技能を認めてほめるものであることがわかる。職場で上下関係の中でよく行われるものであるが、通常の業務ではなく、特定の評価の場面で行われるものであるという。通常の業務はできることが当然で、できたからと言って特にほめられることはないと言われる。評価に関しては上下関係が強く意識される。上から下はほめることができるが、下から上は「よかった」など直接ほめることができず、ほめると「お世辞」、「ヨイショ」だと認識されるようである。下から上はほめられないということに言及した回答が複数あった。

〈上的人是褒められない。上的人をヨイショするのはよくないのでは？上司先輩は褒めてはいけない、上が下を褒める〉〈部下が具体的にどの点がよかったかを言うのと失礼になる〉〈下から上に言うとお世辞になる。本当の気持ちで言ってもお世辞に聞こえる〉

上から下以外の場面での「ほめ」では、自分自身が納得している場合や根拠を示してほめられる場合は「ほめ」を素直に受け入れられるようである。これは同僚などからのほめと考えられる。

〈言葉だけで「がんばったね」「よくできたね」はほめではないが、具体的に「何パーセント達成していますね」と言われたらほめだと思う。〉〈丁寧にしてくださいましたね」と言われたとき、自分の認識と同じだとほめと感じる。〉

自分の認識と同じであることが重要で、納得できないときには「お世辞」と感じるようだ。

日本では「ほめ」は上下関係の中で行われることが多いため、次のような報告もある。

〈日本では目上から褒められることが多い、外国で褒められると自分が下に感じる〉  
何らかの能力、立場のある人からの「ほめ」でなければ受け入れられにくい。また、一般的に何らかの根拠を示されることが多く、根拠の示されないほめは「お世辞」と思われるようである。よく問題になる、留学生が嫌う「日本語上手ですね」というほめ言葉は根拠が示されれば、あるいは、留学生によく接している教員などであれば「ほめ」として受け入れられる可能性が高い。またこれも問題になる学生の「先生授業上手ですね」というほめは、学生の方が授業が上手いかどうかを評価できる立場であるということを示してしまうため教員側からは受け入れられない。表現の工夫が必要である。

### 3.2.3 感謝

「ほめ」と認められることは少ないが、感謝は実際にはほめの一種であると言え、「～してくれてありがとう」などの感謝は実際には多くの場合その行動をした人に対するほめとして受け取られると考えられる。相手の行動を評価したからこそ感謝しているわけである。新聞記事にも『『ありがとう』も立派なほめ言葉』とある。教師の授業をほめる場合も、「今までわからなかったことがわかるようになりました、ありがとうございます」と根拠を示した感謝として表せばほめが可能となる。狭義のほめや評価は両者の関係が限定される上、表現も難しいものであるが、感謝として表せば可能であることが多い。

回答にもいくつか感謝を「ほめ」と認識している例がある。

〈感謝に褒め言葉が多い「あなたのおかげで」「～のおかげで～できた」お世辞ではなくフレンドシップ、感謝、褒めてくれた〉〈ありがとう、ごめんね、お疲れ様 感謝じゃなくてやったことに対する褒め言葉〉

### 3.3.4 その他の「ほめ」

その他、相手に自分の好みを伝えるわけでもなく、客観的に見ると事実を述べているだけのような「ほめ」も存在する。例えば、「がんばったね」「よくやったね」など相手の行動の努力の部分について言及することもほめの一種であると言える。「(こんな大変なところまで)よく来ましたね」というほめ言葉もあった。相手自身に関する「髪切ったの」などの「事実の言及」は無難なほめとなることも多い。

〈「あなたは違う、すばらしい人ですね、そういう人の下で働けるのは幸せです」〉

〈仲間だと言われた お世辞でもうれしい〉

上記のように、仲間だといわれることが「ほめ」と認識されている。たとえ「お世辞」で言ったとしても、言ったこと自体を評価している。その他に(日本語学習者に対して)〈日本語がわかりやすい〉も「ほめ」と認識しているという回答があった。

### 3.3.5 行動で示す

相手进行评估した場合、言葉ではなく、行動で示すこともある。好意の表明とも言えるが、相手进行评估し好感を持ったことを示すためにプレゼントをするなどもある。また、親しくなりたいということを示すことやその後長くつきあうなどの行動で示すこと評価、「ほめ」と認識されることもある。ほめ言葉という言語行動ではない、実質的な「ほめ」の表し方とも言えるものである。以下のようにごちそうになるようなことが「ほめ」と受け取られることもある。

〈相手が喜ぶ、感謝の気持ちを言う、宴会を開いたり、態度で示す。言葉より態度がう

れしい)〈相手の家に行く、ごちそうになることもほめである)

## 4 ほめの周辺

「形式ほめ」とも「実質ほめ」とも認識されないが、外形的には「ほめ」と見られるものの、受け取った側が「ほめ」とは認識しない場合なども実際には存在する。先にあげた「追従、おもねり、へつらい」などもこの一種である。

### 4.1 和らげた苦情、ほめ殺し

少し古いものであるが、土岐哲、村田水恵(平成1)『外国人のための日本語例文・問題シリーズ発音・聴解』に以下のような会話がある。

(隣の主婦が回覧板を持ってくる)…(略)…「うちもねえ、夏は窓を開けっ放しで。(中略)ところでお宅のお嬢さんですか、ピアノ、お上手ですね。いつお始めになったんですか。毎晩遅くまで熱心に、将来はピアニストを目指すといいですわ。」「ああ、いえ、そんな。」「ほんとよ、いつも主人と感心していますの。お上手ねって。」「あの、そんなに聞こえますか。」「ええ、楽しませていただいていますのよ」…(略)…(娘に向かって)「お隣の人がね、ピアノうるさいって。夜弾くの、やめなさいよ。」

これには「苦情」と題がついている。「ピアノが上手、ピアニストを目指すといい」というのは外形的には「ほめ」とも見られるが、実際は的外れな「ほめ」であるため、言いたいことはそれ以外の事実、「夜遅くまで熱心に(ピアノを弾いている)」ことになる。受け取った方もその意図をくんでいる。苦情を言う際に和らげとして前後に「ほめ」を入れる方略がよくあることは示したが、この例は苦情を和らげるために「ほめ」の形を使ったものであると言える。このような例は日本語非母語話者には誤って受け取られる恐れのあるものである。

また、「ほめ殺し」と言われるものがある。「いやみになるほどほめ立てること。必要以上にほめちぎることで、かえって相手をひやかしたりけなしたりすること。」(日本国語大辞典第二版)などと説明されているが、相手を批判するために「ほめ」を手段として使うことだと考えられる。これらは表現者の意図は相手を批判することであり、受容者側もそのように受け取るため、日本語母語話者はこれを「ほめ」の一種だとは考えない。しかし、外形的に見た場合、通常の「ほめ」とは区別がつかないこともある。

### 4.2 皮肉、嫌み

必要以上のほめ、あるいは事実と異なるほめは「皮肉」「嫌み」と取られること

がある。遅く来た人に対し「早いね」、下手な人に対し「上手だね」などという例である。ただし、これは両者の認識の違いから来る場合もある。ほめたつもりでもほめられた人の自己評価と大きく異なる場合、ほめではなく皮肉、嫌みと受け取られるというような例である。日本語をほめられる留学生もそのように受け取っているのであろう。新聞記事の中にも「若く見える」に対し「バカにされているようで嫌い」という反応があったことが記されている。

#### 4.3 侮り、揶揄、からかい

ほめられて「馬鹿にされた」ように感じることもある。皮肉や嫌みの程度がひどくなる、あるいは、皮肉や嫌みは親しい間柄での事と言えるが、親しくない、あるいは敵対している相手などから言われるほめは侮りであったり、揶揄であったりと感じられることもある。

逆に親しい間柄で事実と異なるほめを行う場合、からかったと感じられることもある。以上のような場合は、表現者と受容者の関係によって受け取られ方が異なってくる。表現者がそのような意図で言う場合もあるが、表現意図と異なる形で受け取られることもあると言える。

#### 4.4 セクハラと受け取られる場合

近年職場などで異性をほめることは「セクハラ」であると非難されることもあり、危険になりつつある。ウェインベルグ(2015)の調査の中でのロシア人の回答の中に次のようなものがある。

〈ま、例えば、うちの会社の一階では秘書さんがいますね。とても格好いいですが、彼女に外見に関するほめ言葉を言うかどうか10回考える。セクハラだと受け取るかもしれないから。もし、みんながほめ言葉を言ったら、それは違う場面になるけど、私は一人だけほめてあげると、ちょっと..〉(翻訳はウェインベルグ)

日本の職場における観察である。実際にこのような規制、規範があると考えられる。「ほめ」がなぜ「セクハラ」になるかということ、何をほめるかによって、相手のどこに注目しているのかがわかることが原因であろう。男性が女性の外見をほめると、外見にしか注意していないと受け取られる。また、個人的に親しい関係であるという認識を与えることになる。基本的には表現者と受容者の二者の関係によるものであるが、表現者がこの程度なら許されると感じているレベルが受容者と同じであるとは限らないことが原因であると言える。特に立場の違う関係であ

る場合、セクハラと受け取られることもあり、職場で「ほめ」を考える場合にこの問題を無視することはできないだろう。回答の中にもそれを意識したものがあつた。

〈日本人なら誰でもする。マナーとして。しかし最近はパワハラの問題がある〉〈相手のいいところを探してほめるようにするが、最近はセクハラもあるので難しい〉

## 5. 「ほめ」をどう受け取るか

「ほめ」と「お世辞」「皮肉、嫌み」など、表現者と受容者が同じ意図を共有しない場合も多いと言える。特に、「ほめ(狭義)」と「お世辞」は区別することが難しいと言える。一般的に根拠があること、自分で納得していることについて言われること、態度が伴っている、関係性がある場合などが「ほめ」と認識され、それ以外の場合、特にビジネス場面や何かの目的があることが明確な場合は「お世辞」と認識されることが多いのではないか。ただし、人による違いもある。以下のような回答があつた。

〈自分が認めていないことについて「すごい」といわれてもお世辞に聞こえる〉〈根拠があれば褒めと感じる、根拠がなければお世辞だと思う〉

これに類する意見が多い。「ほめ」と「お世辞」の区別は根拠があること、受容者自身が認めているかどうかのポイントであると言える。

「お世辞」については以下のような回答がある。

〈本質でなく、外面的なことをほめる、コミュニケーションをとるため ありきたりなことと言って確認する、お互いに持っているものを共有し合うのがお世辞〉〈相手の気分を上げる 近い人には使わない〉〈よく知っている人にはほめ合ったりしないが、知らない人には話のきっかけでほめ言葉を使う〉

親しい人ではなく親しくない人に対して、外形的なものについて、また、話のきっかけとして「ほめる」のが「お世辞」であるという認識があるようだ。

それではどのようにほめることが受容者に「ほめ」と認められるものになるのだろうか。根拠を示された場合、あるいは、受容者が認めていることについて言及することが重要だと言える。朝日新聞2016年11月16日の記事に、ゴリラを描き続けている画家がテレビ番組で、毒舌家と知られるタレントから「あんたは本当のゴリラババアね」と言われたことが「何よりの褒め言葉」だとしたものがある。受容者が認めてもらいたいと思っていることをについて言及する、プラスの評価をすることがいわゆる「ツポにはまる」というようなことで、自分のことを

よく理解していることの表れだからであろう。

## 6. おわりに

「ほめ」は人によって捉え方の違いの大きい言語行動である。同じ場面で、「ほめることが常識である」という回答と「ほめはない」という回答が見られることもある。狭義の「ほめ」だけをほめと取る人もおり、人についてのプラスの表現をすべてほめと認識する人もいる。「お世辞」についても同様である。また、「お世辞」は社交辞令のたぐいと排除する人もいれば、お世辞でもそれを言うことについて感謝の気持ちを持つ人もいる。「ほめ」の分析をさらに続けたい。

## 参考文献

朝日新聞 2015年9月12日別刷 b2面

朝日新聞 2016年11月16日14版28ページ「ゴリラを描き続けたい」

蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1996)「待遇表現としてのほめ」、『日本語学』5月号 pp.13-22

蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998)『敬語表現』、大修館書店

熊取谷哲夫 (1989)「日本語における褒めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究(2)』広島大学 教育学部日本語教育学科 97-108.

薛鳴・坂本恵 (2014)「敬語コミュニケーションを阻害する文化的な違いについて ― 日中の「親しくなること」「親しくなるためのストラテジー」の相違を中心に―」『待遇コミュニケーション研究第』11号 待遇コミュニケーション学会 pp86-101

鈴木理恵 (2002)「褒めの返答に対する褒め提示側の印象度分析」『国際基督教大学学報』Ⅲ― A、アジア文化研究』28号 83-108.

田辺洋二 (1996)「褒め言葉の日・英語比較」『日本語学』5月号 33-42

土岐哲、村田水恵 (平成1『外国人のための日本語例文・問題シリーズ発音・聴解』荒竹出版 p109-110

ナジェージダ・ウェインベルグ (2016)「日本のビジネス場面のほめ言葉 ― 日露ビジネス関係者の視点から―」『日本語・日本学研究』vol.6 東京外国語大学国際日本研究セン (11) 野元菊雄 (1996)「ほめるという言語行動」、『日本語学』5月号 4-12

ミハイロヴァ・ユリア (2007)「質的研究法による「Compliment/ほめ」と「ポライトネス」分析：異文化間行為研究へ新たなアプローチ ― 日本人と欧米人との接触場面におけるコミュニケーションを中心に―」、『ヨーロッパ日本語教育』、12号 79-85

## Aspects of Compliments

SAKAMOTO Megumi, VEINBERG Nadezhda

The purpose of this study is to analyze what native Japanese Language speakers recognize as a “*Home* (compliment)”. The study is based on an analysis of newspaper articles and a research conducted in the form of an interview among the Japanese and the Russian business participants.

In this article we define a “*Home* (compliment)” as “An expression of a favorable, positive attitude towards the interlocutor regarding his/her condition (or possessions), behavior, performance, etc.” The study clearly shows that in the Japanese language exist many expressions closely related to compliments, such as social etiquette phrases, flattery and gratitude words.

Generally, it is possible to divide compliments in two large groups: (1) Formal compliments which are supposed to make the other party feel better, they also can be named “partner-oriented”, and (2) Real compliments which are supposed to express speaker’s own feelings or attitude.

In the Japanese language formal compliments are often used for different purposes such as “doing follow-up explanations”, “moderation (softening) of a criticism”, “offering something in return”, “request premises”, “social etiquette”, “amiability”, “celebration”, “education”, etc. Formal, partner-oriented compliments quite often are percept as flattery. On the other hand, the compliments which convey speaker’s feelings/attitude are considered to be compliments in the narrow sense and are closely related to "evaluation" and "gratitude".

Although there are various ways to make compliments in the Japanese language, the individual difference of what native speakers recognize as a “*home* (compliment)” sometimes is quite large. Namely, even the Japanese speakers behave different in certain situations: some people feel that compliments are necessary while others would not use compliments at all.

During this study based on the analysis of newspaper articles and real examples, which were taken out of participant’s communication experience, it became obvious that connections of compliments, greetings, critics, words of gratitude etc. are deep and need to be investigated further.